

## 21世紀を創る筑波大学独自の“ひとつづくり” 「ひとかど」の人物は世界で通用する」

青柳秀紀

生命環境科学研究科助教授

21世紀を迎え世界中で様々な変化が生じている。日本の国立大学も法人化し様々な変革および機能化が求められている。しかしながら、基本的に人間の組織や社会を構成しているのは人であり、構成する人の多様性が組織のポテンシャルに、考え方、目的意識および方向性のトータルが組織全体の活性に反映する事に変わりはない。天然資源に乏しい日本の資源は人であり、今後、大学独自の役割である教育（“ひとつづくり”）はますます重要性を増すと伴に真価を問われる。

### 日本とカナダの比較

本特集のキーワード“世界に通じる学生”という概念は学問分野により大きく異なる。また、学生も特色（個性、長短所）が個々に異なるため、一般論を述べるのは難しい。ここでは、私が文部省在外研究員としてカナダのトロント大学に留学した際、個人的

に感じた事を述べさせていただく。よく言われる事であるが、日本とカナダの大学の違いの一つに、日本は入学してしまえばある程度その後の進路が決まってくるが（今まではその傾向が強かった）、カナダでは入学してからが勝負で、単位を取るのも大変、提出物も非常に多い、良い点数を取ってないと簡単に退学させられる、将来の進路も厳しくなる、学生もその辺の事情を意識している、という点がある。また、日本にしていると気がつかないが、日本は経済的、物質的に恵まれている（特に、物質的には異常に豊かである）。ボールペンひとつみても、トロント大学の書籍部には5〜6種類ぐらいしか売っていないが、日本では様々なキャラクターが付いたものなど、その種類は非常に多い。さらに、日本の優れた文化、科学および技術は世界に深く根ざし大きく貢献していることにも気がつく。一方、人種においてはカナダは多くの人種（移民）

からなるのに対して、日本はほぼ均一である。この様に社会的な背景が異なる中で育ってきた学生を同様な尺度で見る事は難しい。

## 今昔の比較

現在は、私の学生時代の主な情報源であった新聞やテレビにも載っていない情報までもインターネットにより簡単に手に入る。便利ではあるが、逆にそのことについて、深く考えて判断したり、推測したり、周りの人達とその事について話す機会が確実に減ったような印象を受ける。

また、子供に親がすべきしつけが十分に成されていない印象も受ける(会話やコミュニケーションが少なくなっている；家族が小型化したせい?)。教えなければならぬことを厳しく教えることも大切だと思う(その時でないときできない事や身につかないことがある気がする)。今の時代、日本文化の良い面を呼び戻すことが大切な気がする。

## 気がついた事

これは私の個人的感覚なので適切ではないかもしれないが、学生時代(中学、高校、大学など)に直面する問題の大部分は基本的に答えがあるものが多い気がする(正解が1つだったりする。語弊があるかもしれ

ないが、与えられた問題に対して唯一の共通絶対解答を紙の上で書けた人を上に選抜する場合も多い)。ところが、大学の卒業研究に取り組んだり、大学院生や社会人になるにつれて、気がついた事があった。それは、だんだん(あるいは急に)答えなんかない世界に入ってゆく事である(答えが一つではなくていくつかあり、あるレベルが要求される)。さらに、問題さえも自分で見つけなければならない状況になる。ここではマニュアルがない。従って、自分で考える力を身につけていなかったり、自分自身が何者であるのか、自分がなぜここ(分野も含む)にいるのか?など、自分自身を見つめたことがない人は非常に悩んでしまう。この世界では、独創性、工夫、知恵、個性、特色などが大きくものをいう。また、いくら望んでも周りはそう簡単に変わってくれないので、自分自身が厭わず積極的に行動する事や、自分をどれだけ信じられるか(精神的な強さ；自分の信念に従って最後までやり通す事など)が大切な場面も出てくる。これらのことが学生時代には十分見えていないのではないだろうか?(学生時代でも、諸事情により答えのない問題に直面しそれを乗り越えた経験がある人や、本当の意味で自分自身を見つめた人はひと味もふた味も違う魅力がある)。上述の事を学生に常に認識(意識)させ、教育、研究を行うこと

は大切だと思う。トロント大のA教授に、「日本人の学生は教育も高く勤勉に働くけれど、忙しすぎて(?)考える時間がないのでは? 他者との関係や自分とは何かということ(特色)をあまり考えていないのでは? 先生はどの様な教育を日本でしているのですか?」と聞かれ、ギクリとした事がある。

### 世界に通用するために特色を生かす

最近、グローバルスタンダードがはやっているが、これに引つ張られ過ぎると生き残るのが難しくなると思う。国際競争でもアメリカはアメリカ的な強みや特色を生かし、日本は日本的な強みや特色を生かして競争しあうから意味があると思う。例えば、ピアジェやブレゲの様なスイス時計からスイスらしさが、メルセデスの様なドイツ車からドイツらしさが消失した場合、我々は魅力を感じるだろうか? 外国のシステムを取り入れ変化するにせよ(風土を十分に理解して取り入れる事が大切)、独自の道を進むにせよ、自分達の独自性の追求やこだわりが一番大切だと思う。日本の“ワビ”とか“サビ”は北米にはない感覚、文化であり、非常に優れた特色だと思う。また、日本の工業技術は世界に冠たるものであり、製造業“ものづくり”は現在も大きな利益を日本にもたらしている。しかしながら、“猿まね”などと挑発され続けたせいか、最

近では「ものづくり」の時代は終わった」と技術を軽視する傾向(特に若い人達に)すらある。これは非常に残念な事だと思う。研究においてもアメリカ型の研究手法が流行っているが、同じ様な土俵ではなく、日本(人)独自の特色や長所を活かしながら方法論や技術にもこだわりをもって進んでゆくことも重要な方向性ではないだろうか? 最近は流行に対して過敏になり、今まで積み上げてきたものを簡単に捨ててしまう傾向【恐さ?】がある。研究には表に立って時代を牽引する集団がある一方で次の時代の芽を育てなければならない。そのためには研究者の幅を広げ自由に次の可能性を探らねばならない。少し話が変わるが、自然界の多くの生物は、生物と生物、生物と環境が多様な相互関係(複合生物系)を営むことで、単一生物ではできない高度な機能を発揮したり多様性を維持している。このような視点は大学においても重要だと思う(例えば、いずれの片方だけでは不可能であった新しい創造を可能にする関係やお互いを必要とし、お互いの個性、立場や分野を尊重しつつ、共通項を広げようとする関係など)。教育や研究のやり方も一つである必要はなく、何種類ものやり方があって良いと思う。筑波大学の“ひとづくり”における独自性およびその背景となる多様性を大切に、活かすことにより理想的大学を

目指す事が大切だと思う。学生は先生の背中を見て育っていく(学風)。これが綿々と受け継がれ、自分の大学に対する誇り、自信、深い愛着に繋がると良いと思う。

また、筑波地区の人的資源(筑波大学を退官された教官は多くの経験と知恵を有している)の活用や卒業生の力を集結させる事も今後、重要性を増す。卒業生からの情報や機会、視野を教育、研究面に取り入れてゆく事で、現実との対応をとりながら自然科学を発展させ、実学を展開できると思う。

#### 余談：昔話

昔話1； 私の友人の山本君の家に遊びに行った時、玄関に入ると大きな字で、「やってみせ、言ってみせて、させてみて、ほめてやらねば人は動かじ」と掛け軸(?)に書いてあった。「これ、なに?」と聞くと山本五十六という彼のおじいちゃんが書いたとのこと。幼少であった私は、「ふーん、お習字の先生か」と感心していると、「おじいちゃんは海軍にいたんだぞ」。そのやりとりを聞いていた彼のお母様が、この言葉は“ひとづくり”において大切なこと、おじいちゃんの銅像が戦前、茨城県(霞ヶ浦)にあったこと、米軍の接収を恐れ霞ヶ浦に沈めたがその後引き上げられ長岡に里帰りしたこと、など話をしてくれた。

昔話2； 私の尊敬する故H.K.教授の話。「昔は、国にも組織にもそれぞれ“ひとかど”の人物がおったん。中心部のレベルにあわせて組織が作られる。また、それを見て学生や部下は真似して育ってゆく。まあ、子供が親を見て真似るのといっしょだわなあ。“ひとづくり”に関わるのは大変だし大切だん。“ひとかど”の人物はどこでも通用するんだん」

先人の考え方は精神論で古いと言う人もいますが、社会のシステムが変化しても組織や社会を構成しているのは人である(“ひとづくり”には、単なる技術でなく理念が大切だと思います)。私も一生懸命“自分づくり”を精進し、“ひとづくり”に貢献できる様にならばいい。具体的には、上述の独自性を大切に、(1)課題が多少困難であっても、自力で問題を解決していく意識や能力がある、(2)隣接分野との関係やつながり、最終目的に至る道筋など、全体像を見ることができ、などのセンスを身につけた個性豊かな学生の養成“ひとづくり”を目指したい。

(あおやぎ ひでき/生物機能科学)